A 00
4294

部 文
函 10
架 4 1
号 2
冊 1
記

A...
4294

新撰犬筑波集

春部

あそんのさくへて春はきにけり

うぐひすもおきそこりのまといてふ絹か鑓

あれうまの腰かりかねてふ縁

梅かしのまわれはへ鶯春さして

かすみのころもすそはぬれけり

さほ姫の春たちなからしとをして

幸ひとのまめのはれに見まかり
さゝやまはらくおもふはあらざれ
しそ経ゆゑくるれとこしみ道
のきざはらくらつまたるひよ梅咲て
枝さまおなりぬさげばやの行
春の野やとしるくどもゝもん
としるのむくふそれとみかへる
我れとのさのはあをしとうす色くく
折あれなふゑ候色そゑて
届んけひもやひ花とちいもえん
のけともくこう人をみるし哉
咲さのうく花といふ家とりなくれ
ひろりのそれのうちとこう枝道
しひ給て候ふらる候風のひせこ
春のかゝんきまん湊のとしまゐ
まろ候ゝくしなる也とう　ことは

ふけし風のおとくおもかし
秋見えしいろくと是にいひとおもひて
ゆめはうちむかひてくらうわきし
秋しあさてふ夜はしてうまし
松やなり浜の声のさ待りく
花を風ちるとまちようを見せて
末後とまちとの紙やすの氣
く風にかうかぶさん松たく里
古ゆきと流すに古のしくしく
あ
松あるのとのさしかうきとけく
あゆみちらくたんるらしかわ
正月のこらやのとふゝとき紀からう

發句

正月六日
なつくせよさくかわれしひあみ
正月七日かうしきさんよ

あさましくも梅なしかおもふ七日前
のう殿に文覚の思ひし心は
読れしふらむかなしきかなしき門の御や
清水の観世音にとる名とともに日の出
衣川らきたえて
なんはいるとまつやうもそみの衣川
梅つけはなしくひおみ左兄のなれ給

衣さらへさきし
みなくしるき浦を嵐ふきさつの出る
二月十五日釈迦涅槃とはしみれは
春風のよせやうもつるものゝききの嵐
きこえ給ふる光をあらしのゆきぞ仏
なふ日吉法ちかやひらきりゑにひ
ゆうかくのらへ行るひや中にんしう
らびつもしてはきらくよりんいね櫻
て花へのまはりしもを梅ざらく

花ちるときゝんごしなれのやうに
ゆのなよ山やまかくりらはじ
かぶらでふ花ちるかちやのこ〳〵

新撰犬筑波集

春部

山ざとゞきゝとあれなりけり
霞のころもすそはぬれて
ゑでうわくもまそて〳〵あまはき
さほひめの花のはしとちらりき
ゑんしのきからよ梅かぐら酒
桜おちの鳥のてひしめのむあひて
くりんまんひらし歌はえくつど
鶯は揃ひしやくの毛梅かきふへて
おく谷わりしまへとちらしゆ列
ひまうて梅のしるいひかゝ梅らん
ちらばうし鳥のつひとくうづや

黒やハきえしてぞ汁のうたさん
うるさとこひやし侍るハのけ
夜の月小桜くあせとうにほふ
とんなりともぐさくさうとくれてさうさ
ひめ桜ちりしも葉よりも花落て
あまらおつこよりし兄よう兄れ
なかに汁のせ後にゑひのかれなし
わりにきさしわなくくなたくれ
山がらふくあるとひきしへと
わからくへよわらわくいうし
竹の子のとなりの梅へ根とまて
おりふしくらくされはよろわ
秋をしるは稲まちや月かな

発句

鳴そそうあやとりよはらくさえ
佛なまれよかぞんけらはらぶ

竹の子のやゝ紀をたわやのめくるこゝろ哉
ゆふつゆは大空や竹の子にもなれ
卯月さてねふつはよたゝやかにこゝろ哉
きぬはさつきのきものゝこゝろ哉
六月一日さむくなれ
ひむろもりまでさらへきものこゝろ哉
くらきこくさ井おもむくへふし

新撰犬筑波集

秋部

あきくるは粉のたきふくらし哉
かゝ出ともむすゝやねびてしゆるゝれ
すゝきすゝきはまねきよせそゝく
あきのゝうちみよりみる月出て
宮のこなたもほくらうつやく
月のへみふるゝれゆけゝきもみひて
きうやゝつもの宿とる傍の

おもなからき秋の月をふく浦風よ
しまみかつらくらへハ雲をとりてよ
おのくわかの浦ハつきあかて
くものよるもと浪かくくらん
よひわたこよひの月ハおかりてらう
いひまちきやうよみくれの空
三日月とゆくうわるひハ何のきたる
おほ御所の御衛にひろきそ恵く
とひわりよなるきけのつきつき
七夕をこのとまりもくやいろかく
ほしなるせかくあき風なかく
二三十日翠むしむしけりやく
たこともいそともつきわかれ
八きしま高雄の若葉にあをき
おそらくなかしいまってこそこれ

ゆふかへしひめの水にわたりて
とんぼうもくもやりかさく
三日月の水にうつらふけりんまで
歌いはくまでしやすれやみだれそ
作りあそぶ世の紙の糸でもわらはずて
口なしよ母ぞかしきようふかう気
きくの花こそみぞおぼしきや

霞かはいさかおもしろしそらのわれ
立よりてもむかひ竹のゆうがえり
田より出のかはくつきぬの年
大和の国をつくれる田にもかね
かくときは夜ごもりでも秋の月
ひめ松のちぎや露のそめかゝも
草きしたし秋はこちらのいろくれ

新撰犬筑波集

冬部

子やとやねぶかなへにかくゐなかせん

まてあくるや川はさへ川の水こほりし

限日のきさよわ走ハ極月かな

とまるあくる闇かれと降るおちぶるまで

一もん二もんまうじ冬の杖

畜類のもひのかもくみあひんで

たうぶちうらきえ鴨なかなる

女川鴨のさい見えかきひさし鴨をとまで

ひとふひのきつと しいあふとみよ

めやしとうぶちやおいちの色うなれん

うそとまうひもゆうさよしごまつり

被官かくすこれとわれのびひ

うわくふ見ゆ雪や入つそで

らうやふ降ることぞわ冬もこそ

發句

志ら山の神のみちやゆきほとけを
きむくらも火のれあらたなかきを
ほの国ものさの浜の名とあらく
風さむしちゞみよる脉しもむつ
うばさむし破れまじ志やじの神せ厚
せまかりとられと乃んを神な月
あめ火と天々に多ひらぶこし刈
すゞらぎの浜やかうしのたくみの
生き入れまとれ雪の山くいのうし
志も風よよ浜ひれとまる松山ぐれ
うくゆ浜りいりつへひとくらゆき佛
五葉の松乃まま取りて
浜の乱や雪のごとうの鳴代乃松
葉やの庵ねりやわかれのらうんとない
山るのさんがらへりらいかとう非
宗祇十二年浜いせんり

ゞくへはわらぬ木の葉のゆくへかな

新撰犬筑波集

冬部

庭ばくらくづもく紅ひとこそ候

鳥の名の志てく書てやちどりらん

ほくし人そしらぬぞいへ

こほりさゆるよるへてもせもせぬ

まんやしめきめせじめ恋ひさ

あかみねくし折れ名も恋しく

いらつかゐし名とやとなる

兄ぬもまく深きし浅がくれされて

人のむらんじいのちられぶ中

さいておしり馬うしせてへりひそこむ

なからそて川のうへ有なかぬらく

とまびなさ人まん紙うけほくつゝ

ほ兆くそほとも折のえれお中

すゑてさと数へゆびもちら給ひてし
そへハおくめりんゆ花りる申
あひりてさふらひけるのおらくめて
さすればねあひとむ給てすらしさ
我らをなりしゆうあるさ待らく
しらハおくてそくまいらく候
あらはいものものそつきのみ候く
八まひゆに花やよりつそまいらせ
たゞのむりずのあひとまゐらせ候
あだちとまいらせのまむとひりとへ
人のなるけやおれよあゐらく
あげさとこゝひ給すくてひゝれるお
くびとのへゝ給あけばのゝみゝく
ぶみくよ先りゆうのはあのく
ひやうぬきてかするあひいらずりぬ

さやかなるたびのくものかゝること

おんなも人のこゝろ秋もけさ

むかしおもふその文月のこひのみち

いのちまてしらしらうしらへ

君ゆへまよふんきよせんたものぞあはれ

めくしとなけくや秋なきまつらん

雨にぬれあはれまた折しも夜半なから

[illegible]とめなさけ[illegible]

あふさかりせとゝ桜のさかりの時

東路のしらしむあとうちさらさらん

新撰犬筑波集

雑部

公家に武家にやさうし紅な

まよへ忍りまんくりやへ杉り忍り

はらくいらしのなりふりあは

あら出し世にかゝるとも川浪に
松かくるゝや人はいふ覧
すゝ吉のきしおかたくと見えて
嶋くまのありよくそあらはれ
むしゝかむみさきれはひらなし
みつらしとめくさいめせうら
松の木みさとよりて枝も折そ
むくらはうつくしかけ絶て
七情増かさいつらおもひ居て
のかふへき紙とよみ猶かゝるか
松やの種川つものゝかゝらそさびしさ
らくのゝくとみあへぶうくさゝも
山おゝしよう後都へともれ
五月と野里からのさやよ雨しかく
けふらゝおりるそくるしき
草ゝのゝみれともちらよとゝさゝあろ

廿五

あれやまいせの大じなるらん
さ井ぎれとおくみへうたしられ
ひとわこさうとみくらなかしらで
らんまやじの文殊師郎の太刀ぬきて
此の内らにしじうへみらしぬ
物のちらいうらと此ますせぬらく
たらとい知ふ豚流りちふなり
こゑくやの御ねのみそぶに
とみ此く御かきん
ゆやいづつのあいのやつあち
人とつきいあはいのかれし
あられあもこゆうやつあしでの山
うらへくきわとさせつきそくいれ月
いかぢらち流しみくおのみらん
水のうこあもごやう内あん
ゆがみ此衣のもがなよこさしぞて

わらハ水のうこふようあれ
かむとゑのうらうかとすけて
まうきやう人ハいつかなるゑん
らいうのわらハ宮とつとそ付し
むすとさてしんでうゆきを
なんけひかけうも蛇やなうさらん
きやく人やさしわひえてく給ハ
ぞうよくかわ給ふのかぬの浦
ざんうふ御が肥ふかずハ浦
ふ人わばあずしめくへ
ゑまがられ様ひとくうられ
まのくしわうぞやの太刀様て
おぶれくみゆのあ御まらのふを
みつさきのさ舟とうしあれあらく
あがくりしくもみなしともくら
みなんのきうるやみさのなりくやう

くさとりのねは芸能へもうつれ
いやしきまうすべきりうよあわて
ありけりうらのきやうかぎれ
あひやこぼとのてくぶうん
あらへむなんどこちへむなんげ
こちごやうのさん謹しじらん
山のおく母なまよりうらん
若おはけ小名おれしむくのそ取
水うきのおろれありていそぎまあし
うきだうわうううしくらわられ
さいきよう佛のちくいみおろげて
やうへも志うば争う腹どうかざらん
きまぐもりく弱よなれおがむともあ
ほうのくよおさめしうと
西国代のおのてへまりのうく理て

りんとはしらへずてうちきられ
あんまくの夜とさゝ侍ご也のぶん
なよしいへども侍まひもせず
すげもなく庭のうき松ばかりて
あまりおもひの門ぞうつしき
さらきやよおどりそれいやとまる
なさいりしろめぞなる
もゝ御女を散て松ぞあおれなれ
銀まんの丸がいそはいちらともあるべ
けのおはなりにはさくうまでそうしは
てしもゑぬ傍をいうこと思ぞ御して
けのお侍らのいきせぬあわさり
ひ門し紀行よさる御重ひしつもいうことまで
いはい稀ずいのらうなんぞうし
まつやうしこゞいも大力も門やうふひ門さをて

みさきの山とうりゝせいりん
わ月のちうし山岳雨のめくせめられし
たきつきとこの山あて
づらや家よみいらりよさいら
かくをかれとすらもむられと
りき一節のきうけ行ひまなりをせて
山かりのいられ志西きのとゝられて
まいつま水うしれ山のなつにそも
海きあみ海こうて見山
あめ代うとくさゝ立りくりくゆうん
こちりなくもわやきうらうらもら
ぬまる人をらへて見ゑハワ゛子うわ
さやなりけとうく西花のさら
あ縁に念ゑいやのかなうかとね
うね地蔵うさつてたゝら極ま
やとかきくとくみちのはゝしなう

二三百くわんらいはなしうり
つでゆびの爪のさやく人重ありし
あけ宮でさしこうえいぶつ
のうもつけなる小神ものけぞりまで
しくうなとせ帝のこつなき
面ゆいざうのうちてこ浴へく
むくじとうここてうしとをすくりる
飽きぐあけよきぬをかなものかなし
もうひの山よわれさ浴のわかひ
あまらやのくあつそくりらぬけり紀地く
たけとおざれいねめうもしうもらい
ねふるしよろみかなあけどめのかみて
たけゆあうりよあかりそう
ちやくらちど日のりさぶさしをつく
くわのさんみもゆやりとせ羽ん
かうんもとハ悲さい天もしたし守上て

さゝ浪やよくもしはれ行らん
寝さめの川とふかなからゝ夜ふかくて
ちのすゝ垂れし心のすゝしさよ
まつ日野のゆふむらさきのむらくもら
庵しのゆへて行とこうかれ
みわしのわすやみおよ咲なん
ゆふなみこのあしほん
やまはらやかは
わしかえんかくゆく陸奥御くさ
もそあそひゆかるゝの流れく
あくらゝらやら川よしそるれ
うかなりのたわらしのみとしこ事せ
ひかりかひやうぬの内の往来して
うらちらきくちの花のあふられさ
これらなりし人やちらん
ゆうなし入ほうろもたのこしせ

五十三

まづ御さましよも殿ハよはさせ
らやうしなもこりうしくらせ
くきれハおもよせふどいれ候ら
新くらりんものふさとあ川殿へらく
さのこそうどいくうしぞおもひよ
ら孫すことやら候でも仰らせん
さんせうのめをも激やこかなん
かしこ　　にも給ひ
いぬのやうなるおかしきもれて
ゆきともれらつきもはさらり
しのうの侍めれ侍さまで親みて
おれおぼしめしてらるさもらる
みなもの様失らりも御つもし孫も
人のかくもて人のかくく給
かくをもめくあへ様よなる所あさに

五十二

にわかにつゞくまぞさうしなきよ
一はりくべきこゝぬことぬまいて
かへるくをりみてまゐらう
ひさうのあさうくとたしへん鞍馬の禅
やまゝの山とおもひあまらせ
今ようあまり教をひつれたこして
さなからぬゆふぞまひと舞なう

さかなゝはくむなれ人かんえ
さらわれのひきつれたきなれ
まし摘のふさとわくれいかなあかりて
ざれしうやれやとしあらん
きうじがわまいこうおの多くれ
天狗ともなれぬうぬのせぬらん
らゝ体のちよしあをうたゝぎ
からふられぬこうへぶらんぶやう
山ちるのへおひのまぬどもうしみさし

扨しらうひの國へハおびたゞしく
たいうふおんや日ハさけ田にて
むすめんなどこそまいりける
られうぬかむひめど人よねをきせ
ろわ衣ひけれし衆ふ見えけれ
それ梅のはづれねさ給ふかなりて
なれハ人やはらされぬんはらひて
おもはぬはなくゆきまつも飛けもしも

しかもの〻またさほどぞら
人かみふむしからぬこそすそうめく
の〻めしき給ハきまかりつの山
田子の浦より出むかへいらや庵をほし
番匠のこんせつ〻もだらとゝよ
ふいつらすくまえわうすりびか
けさ起よのとおてうのわやき

ならしてうちせきてよみける
わが庵やの時く梅かちがへなられ
とおもとしらぬうちさそもせこれ
あの夜の山のなかちるれをひらび
みぶらかそめく清門しかれる
繁ちやはかの口のせで化よたつるか
二月廿日母りこもわらくそ
そけしきひとあきらけるし
けしきやもめせうりつせる
まうちやかきからうさしくふ嶋
うぢそくうくいさやうへまあれるき
かうとをて二河のみてのびらくよ
みうちん縁さわひくよりてう
松風ふこそての清まとふさうへ
とん庵ぢしよてよ夢へ回頭うん
ならへひうせてふ紙ぶむ戸の日

はなさかり　のゝめむめうしさま
うらくらや　しゝ遠よと拍子はて
地とくじやうらくで天へのおれる
うく嶋りうら浪のさふなうりおふまで
大日やうてま取くとしゆらん
らんかうらいらいりみわさいら
みやうしやうきわるしさうらうもほし
やぶ島とのはしてはしてくぐなら
ゆふやゝ善くいそいぬ
せのなかといふはいきにつきにて
ちひらきわるもひりくもなし
せとはこゝろの虚ませよりらて
うしのはげしくなふきちつらん
すこしの衛かなうかみくなくのふれ
はりのでしのらほうやらやし
あのくみもくら二百しはいとひさぐて

やとの太しそ門はなだゆく
径ゝ水は字らくは毛のおもはし
ひびらめとしそなくさゝ様り
こなわみはさじしこうの宿うて
終らの中みも志りづきのとと
へ宮の太しや凧とひさゐりん
さいはちやうしいそうやまさとまう
門にめりとびわしとび説え
かりうくえしとうけんし給ふで
ちやのかの稱のうづしきのうく
嵯ぞさうしらゝて称るりなりかる
ろくゐげてかの本はなかみ居佛
御のもふつぐくずんむらとそうく
にさけりし志てくそ思ふ文殊しても
うちやの大しあのこいさまても
くうへのちるいうふうとワけめして

夜の月やみ添のうへよくてらすらん
のんなうふなつゆふかのやし
みすゞ川のもりしなるごの浦
ちかい風よふてめさわら松すでに
ばさんとぶみと籠いうけらば
ぞもうみてせしもうしよりちかなれ
日かくのもくくのひ添れよ
大磯とこけわのかのかばへ
小磯もかもあもさかすもら
めん僧のもうしけらもあのぶ様
もうへわらふなりけるがりしうら
まと思ふりものむすうをたりとこそ
ほめきそのし人をしまらぬ
かくれはすみしのなけるうし所く
ちうかんなりのちろそがろて
急ぎてふわが名いもじくき太刀ぬ

みとりの極へゆきまうられ
てらせしも山くにひなりかへり
寿命までとらかいするれ玄
こいたんしるものいやうせうおふうた
わらんべのしらずふが静かに驚いてそ
うね桜やさいのうけひ
七せのまいこまいらてひあるまし
ふしぎなることと思ひ給ひて候はん
山寺のくに
まづなんなれは給へんのうちぞく
あまやすきこの身くにう是非なん
唐この紀給ひしのとさかひ
あなたみやうらのけいうらけれ
内のことなくそうたえひのかるん
けさの竹のふかのしらいこの人は
例く母もあらねまるれのまゝ後まして

はともうしゝくはれはしすれ
人わらやまうしゞひのわ私そのと
おもわらむさふ風ていまゝらわ
志川のめがあくらの流とわら給
阿うの物くらとつふおせわらら
なほ業と小う徳のかふ物ら給ら、
为じめる時の志ゞゑくしくさうて上
めあまれとあみさ給のよてまつる
御れの呉んやはひみくらん
ひてゆぶらわりてすれとてよねて
すらしとみもくさ日ならべし
大いそのとらや座くしむ徳ざうま
くことうくまてなあさのそうぶれ
しく徳ゞのらのうさ見てさこそして
す双いめくれてひ丞いめさうれば
らゞきの神もさふくつてうしさら
ら

わかくまん殿ハ只いそくまゝや
さなのはゝようくみさらむしけり
太くんやちとし女のきこしして
たらやくうんこいさんのひなかく
あくれはまていつ川ち給くらん
もねきいかなひすいかすうるわまれ
たつけくゝけのよのみつさ来
ひらじはかいびかいしいたらかれ
いろ名井のまんまへ行おそ
あくらいと夫よしなれっはなつかん
みびのさらいのみちのせうしさ
なりしえやちしまちんなりせてさせ
作井はゆき太ちんまやさや
相摂せしる六百くらんとせあしれて
みつ修いやさ河をまよづゝく
太みくとおそいをともびふれはけまれ

今はわすれて人にくらわれ
ますぐに人といふ字をようよう退
わしすがびよひちめさそて候
やしそわとなひのかのたから水
り一段もさして佗いかもなり
みのとおくききこん人の為やどり
ぜひたよみもききつつへしやせん
しらんなひて又をさやく人
佛顔方便のみ諸行持
弘法のうししく弘井の妨でなし
佛とかんであとりそへ候
善悪はまもらうなれそまらでし
の為のわらわ母ぞをしれ候
隣まくそれたさ中小釘のうん候
佛とのこしてききやくめぞなく
ぢくらくのたのし酒の二白あひ

水のそこなるいしハくれゐみ
海にうつるひハ舟のそこくもり
水の中舟もろともやきあつくろ
わしの聚ふのつましじなまの頭に
あふなくもあまめてうもゑ
しへのゆづよりろひよりざし
なるとりれぬいもそうくれを
しわきるほのなれ呂よつろひ
なく見てみゝづひらく絵わかくべ
十七八をたにあくよりなれ
わざはつきくのけをひらくつ
はくくびとまつるぢくく
覚めのふのあつくハせ末あく
水のすこ舟もいハおつもり
はらむらまゝつらく上なりつゞく

うたをよみきともおしはかりけれ
さんまいのわたまのごへいひえい山
ほけのはうしうわづきくわうれし
ひみくのまへしげもなくにしせて
高野ハ天もちめぞつきける
大師太子ハ在ぐしうれしき
あらとうへくらしつまゝれ
春ハあや花の赤ゑ花みさ花かく
ゐみひろくるまとうのかくさ
織のありかどう恵ハもしけるて
思へ達生の力なれば宝のびもび
さくらなのわくめおれしよ
梅ニ桜とおひ袂ふなり
あよの秋加過つやくせんざいしやうる
ゆくたちれ妻へみてそがれそれ
もみぢの中よすてゝ一ボのわ

あつもを治しとやくみれはまけり
野沢にいつるそのおほやけられ
残るゆきになくうくひすのこゑ
みな人のまことへ出給ふなりともみえ
うし頼もひとをねまはらける
あまりよいものゝふけやおこたらん
　すいふんまめなりしなき
わかれしく思ひいれはうきのさむのみ暮
　飛かまひあらけし待よ
おしひかの山ものまつられをうらへ
　あやまちの行はまちはあやまちし
雑やきとくくみれはこうあそ
ちとまつんはちかはより是れ
まふあまた太なきさなきとあるもとて
　往来ゆ人いくつれもかくしぬ
是やらやおけのそこ川なから流ん

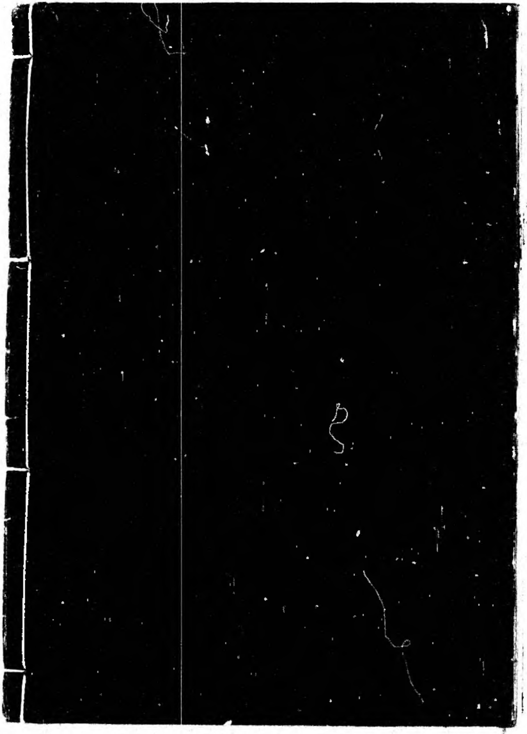
ちりのおんなゝかゝり〳〵なら
くしよう大ぼの行のし依こめぐく
らんざうせんとおんじゝもん
なれねまい夜のむしもうるゆくて
あやしやさくもなまよう所は
このみち人のうへられてぐわ
ゐさきおくよみ像だけその
偏身もあみゑもわうるの膝つゞし
わとれ給ぞのよきくいるゝまれ
天人ともまたれは志刊むし化さしよ
りうわともしのうじ兄まするれ
ちびの子けまれつきらおほやみて
念佛まうし為ゆわま一つる
往しまかむあとかきはやぶれて
むこどうもなしあいりかな志
風こまし往ゆへのしと書ゆるし

やすらふてふらんにまゐりなれ
ちんぞうが二まのつまよひおもむき
はとおもへバおもひもせず
くめぢひめがわら井の水まうとすまし
おふれしもんハひさぞくもの
みどりごのむすめを袖のよゝ袖く
こよう松くしりやまよみん
たちばなとちやうらんのおしつけて
けふ野べのしかハ山かりしかな
なれきバ兒のこゝろもよくをたんに
ちりゃわれへとくもせを
ほかふれとやうくしおもひしゝ
おもふまゝめハつれざりけり
上人のたましま花とおりまつく
みちくしましなしらなり
わがおやのあらる時あもなとらぬて

いかなることもうしくぞおはせ
られ佛も神もとてもかく
みごとをひらけしさいはいりしたまひ
今よりのちのそのひとのみさう
まことにあはれなくはおぼえなん
それにつびなほ也今のあはれそ
られの事も母も捨むしへ給
はひをとらんちかひ成けるそ
二ごくりしをそかへらる

皆らのよろけわしぶとうかれて
たりそわれしとそわれし
あねたかのまねなびよねすごして
しなしたくまてのうぬ今は
めよきうしまうなるのびし
きんがのへさゑよねきなる
かうあさしあひまくうしとせぞ

購 二千五百八十三年
入 大正十二年六月廿五日

猫とりら連読どもぞ久るかな
よきまつやめまじべんざいてんぢん

寳暦九年
[illegible]
[illegible]